

## 特集

## もつと社会へ目を向けよう

## || 隣人である少数者(マイノリティ) ||

心の葛藤と闘いながら、生きづらさを感じつつも、自分が自分でいられる場所、時間を求めて生活している方々がいます。理解されにくさゆえの偏見にも、さらされていきます。

とても繊細で難しいテーマですが、寄稿に応じてくださった方の声をいただき、認め合える社会が実現できますように。

## 性の多様性を教会で生きる私

健軍教会 青木 みお

ありのままに生きることが、どんなに苦しいことなのかという事を痛感して生きてきた半世紀。私は、トランスジェンダー女性、いわゆる性的少数者(セクシャルマイノリティ当事者)です。

「悔い改めよ…:さもないと悪は、あなたがたを滅ぼす。」

この言葉がつきまとい、受洗後もひたすら隠し続け、また存在自体が聖書に背いていると悩み続け、父母を裏切る不孝者の私。教会に集う悪の存在として私は、生涯悔い改めることのできない者であり続けるのでしょうか?と祈ることが私の日々でした。

誰にも言えない、誰にも相談できない

苦しみ。(幼なじみの一人の友だけが知っていた。「決して口外するなよ」の一言を守秘してきました。)

自殺を図り精神に障害を発症、施設で更生のため入院。施設では毎日、聖書を飢えた子のように写経するかのよう書き写す日々。その施設でも悩みを言えず、「治らなきゃ、治らなきゃ」と祈ります。牧師が訪ねてこられた…:けど言えなかった。

罪の赦しを得ることができの?もし教会も追い出されたら、もうすぐところはない思いでいっぱいでした。

決意をもって、教会に牧師を訪ね、私には「はい」と伝えました。(グローバル

な観点からLGBTのことはゲイと呼称。日本国内で言うゲイの概念とは違う意味。)

その反応は、いたって穏やかなものでした。後でわかったことですが、私と同じような悩みを抱く信徒や牧師さんと繋がりをもたれており、性の多様性について深く理解されており、牧師さんでした。もうこの時点で福音ルーテルにて受洗できて幸せであったことを思い出します。この時は他の教会員には絶対に気づかれたくない思いでいっぱいでしたが、ある災害を契機にカミングアウトすることになります。

それは2016年に起きた熊本地震。性自認が女性なので男性と同室は無理だし、排泄・入浴などは長らくの女性ホルモン投与で体形が変化しています。また性転換手術は受けていないので、生活において、どちらも利用できず、公的避難所を半ば追い出された格好で、健軍教会に避難。帰る場所もなく、生きていくために意を決して、避難所となった教会で共に生活している方々にカミングアウトいたしました。

その後、牧師より女性会への入会の話

をいただき、今に至っております。

一部の人は、言います。「これは区別であつて差別ではない」と。区別も色分け、差別も色分けです。私はLGBT啓発活動をしています。皆さんすごく関心をもつて聞いてくれます。だけど、LGBTって可哀想とか、憐みをもつておられること、それがすごく悲しいことです。私たちは決して可哀想ではありません。ただふつう、あたりまえでいたいだけです。存在を認めて欲しい、それだけなんです。日本では性同一障害という疾病(病気)として扱われ、性同一障害特例法という

## マイノリティ宣教センターの紹介

1977年の国連人権小委員会の見解によれば、「マイノリティ(少数者)」とは単に数が少ないということだけではなく、特に、自分達の主張が社会の中で聞き入れられることがない、より弱い立場にある社会集団を指しています。その意味で、マイノリティの声を聴く社会とは、「弱さを切り捨てない社会であり、様々な多様な声が響き合う社会であると言える

法がありますが、世界的には世界保健機構(WHO)が「性同一障害は病気ではない。これを否定することは人権問題である」と宣言しています。

昨年、私は教会に入り浸る「腐った林檎たち」とも言われました。けれどもイエス様は、きつとこの「腐った林檎の群れ」も受け入れてくれると信じています。イエス様の生きようは、まさにクイアであつたように、私もクイアとして生きる決意と誇りをもつて生きていきます。

※クイア：「不思議な」、「風変わりな」、「奇妙な」などを表す言葉

田園調布教会 牧師 李 明生

でしょう。マイノリティ宣教センターでは、「人種主義との闘い」、「ユース・プログラム」、「和解と平和のスピリチュアリティ開発」、「国内外への発信」の4つを、活動の柱としながら、この社会が多民族・多文化共生の豊かに根づく平和な社会となることを目指しています。

マイノリティに「寄り添う」ということは、矛盾のようですが「自分がいかに



小さな声に耳を傾けることが出来ないのか」ということを引き受けることであり、それはまた、理想的な自分にはない得ないという「自分自身の弱さに向き合う」ということでもあります。人は、自らの弱さを引き受ける時にはじめて、社会の中にある多様性を尊重することが出来るのです。

2017年秋より「からふるカフェ」という、外国にルーツを持ちながら日本で生活する方々のライフヒストリーを向うプログラムを続け、その記録をマンガとしてまとめた「からふるな仲間たち」という冊子を第2集まで発行しています。

各教会には既に各1冊ずつ配布されていると思いますので、是非お手にとつていただけたら幸いです。

(NCC在日外国人の人権委員会

マイノリティ宣教センター運営委員)